

見捨てられた下前津弥生時代遺跡

—弥生時代中期(貝田町期)遺跡—

和田 英雄

1 はじめに

名古屋市「東本願寺別院」の東側、名古屋台地東側縁に弥生時代中期（貝田町期）の遺跡があった。第2図の17地点である。1975年4月、名古屋市教育委員会は発掘調査を実施したが、未だに調査報告書が発行されない。見捨てられたのである。

故吉田富夫氏は、丹羽主税氏の談として戦時中に尾上隆治氏の敷地内で防空壕を掘ったところ、夥しい貝殻が出てきたと私に話されたことがある。17地点は尾上隆治氏の敷地内であったと考えられるが、敷地東側において1987年8月に工事が行われ貝層が露出したことがある。露出状況は私のホームページ<http://park19.wakwak.com/~wadakouko/31.index.html>に掲載しているので、ご覧願いたい。

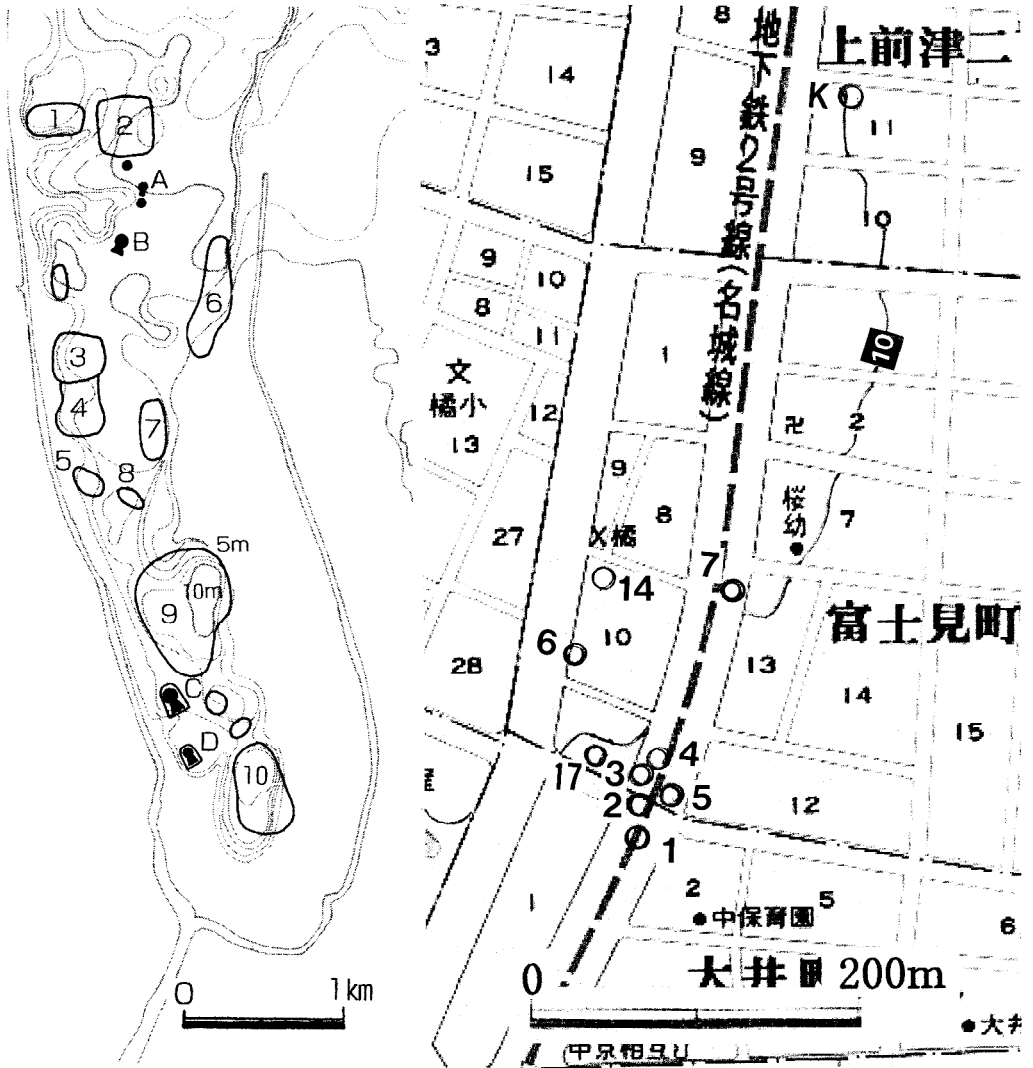
私は、防空壕を掘ったところは、この場所でないかと考えている。いずれにしても昔のことであり、ここに遺跡があったことが「民間伝承」とならないためにも名古屋考古学会会報「古代人67号」に書き残すこととした。

1974年11月1日付「プロレタリア考古」機関紙、第15号（注1）紙面において「名古屋考古学会は文化財管理体制の中にくみこまれるか解体されるかするだろう」と報じられたことがある。解体することなく存続している名古屋考古学会の会報に、私は見捨てられた下前津遺跡を記録してきたのである。

2 遺跡発見の経緯と調査に至るまで

1974年5月、当時、名古屋市文化財パトロール員であった私は、名古屋市中区内をパトロール中に、名古屋市中区富士見町12番地（通称、時照庵）において、1974年12月から家屋新築及び駐車場建設工事開始に関する情報を得たので、名古屋市教育委員会へ連絡したところ、1974年12月2日から名古屋市緑区の古窯跡の発掘調査と併行して行政機関直轄による発掘調査を実施することについて連絡を受けた。

17地点（通称、時照庵）の家屋新築工事中（第3図）には、1名の担当者が立合ったが、黒土層中に小土器片の包含を見ただけで、なんら遺構は検出されなかったということであった。調査の主力は併行して行われていた古窯跡の調査に注がれていた。



第1図 富士見町遺跡の位置
及び周辺の主な遺跡

第2図 弥生時代土器等出土地点

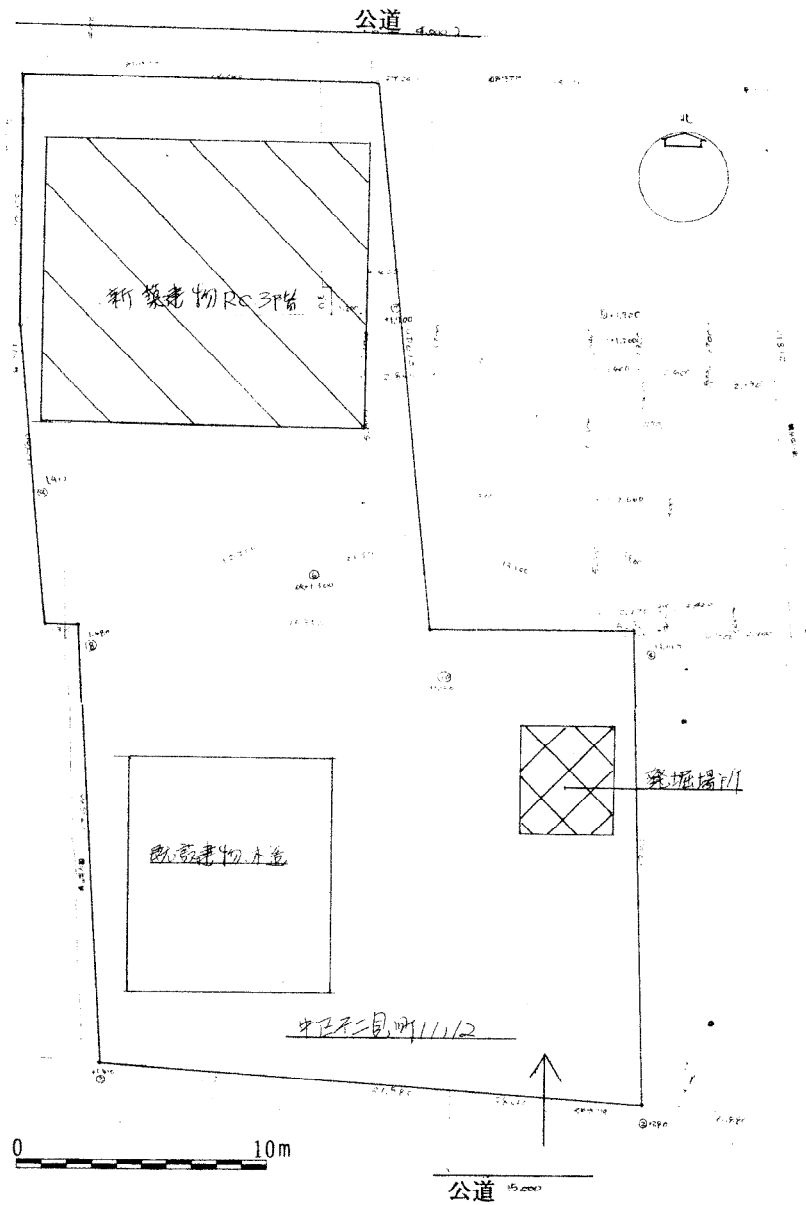
第1図

- 6 富士見町遺跡 7 古沢町遺跡 9 高蔵遺跡 3 正木町遺跡
- 4 伊勢山中学校遺跡

(名古屋市見晴台考古資料館研究紀要 第1号/1999 名古屋台地の「水」環境考
第5図、台地上の遺跡と開析谷—瑞穂・笠寺台地を中心に—より引用、加筆作成)

第2図

- K 春日町遺跡 ○印1~7、14、17 旧町名、下前津遺跡各地点



工事名		新築RC3Fビルディング			工事設計図	
NO	1/100	縮尺	1/100	日付	2011.12	主任
NO	1	設計	構造	製図		
K.K 辰巳建築事務所						

川村工務店提供

第3図

しかし、1965年3月、地下鉄名城線建設工事中に、17地点（通称、時照庵）から約20m離れた東側の地点において貝層と土器包含層が露出し（第2図、3地点）、多数の土器片を採集していることから、貝層あるいは土器包含層の存在が推測される駐車場建設予定地の工事を担当する川村工務店のご協力により約4×4.5mの規模で試掘したところ、地表下約2mの位置で弥生時代中期の貝層を発見したのである。（第3図）

3 調査の方法

弥生時代中期（貝田町期）の貝層の存在が明確となり、名古屋市教育委員会へ連絡したところ、緊急調査として下記の体制を編成したことについて、1975年4月3日、名古屋市教育委員会文化課担当者から説明を受けた。

調査の管轄 名古屋市教育委員会

調査員 故大参義一氏の指導の下、発掘調査を統率して遺物整理を担当する者1名及び調査員2名

調査の期間 1975年4月4日～1975年4月24日（日曜日は除く）

調査の方法 緊急調査

この調査には増子康真氏と共に1975年4月4日～4月5日の2日間参加した。

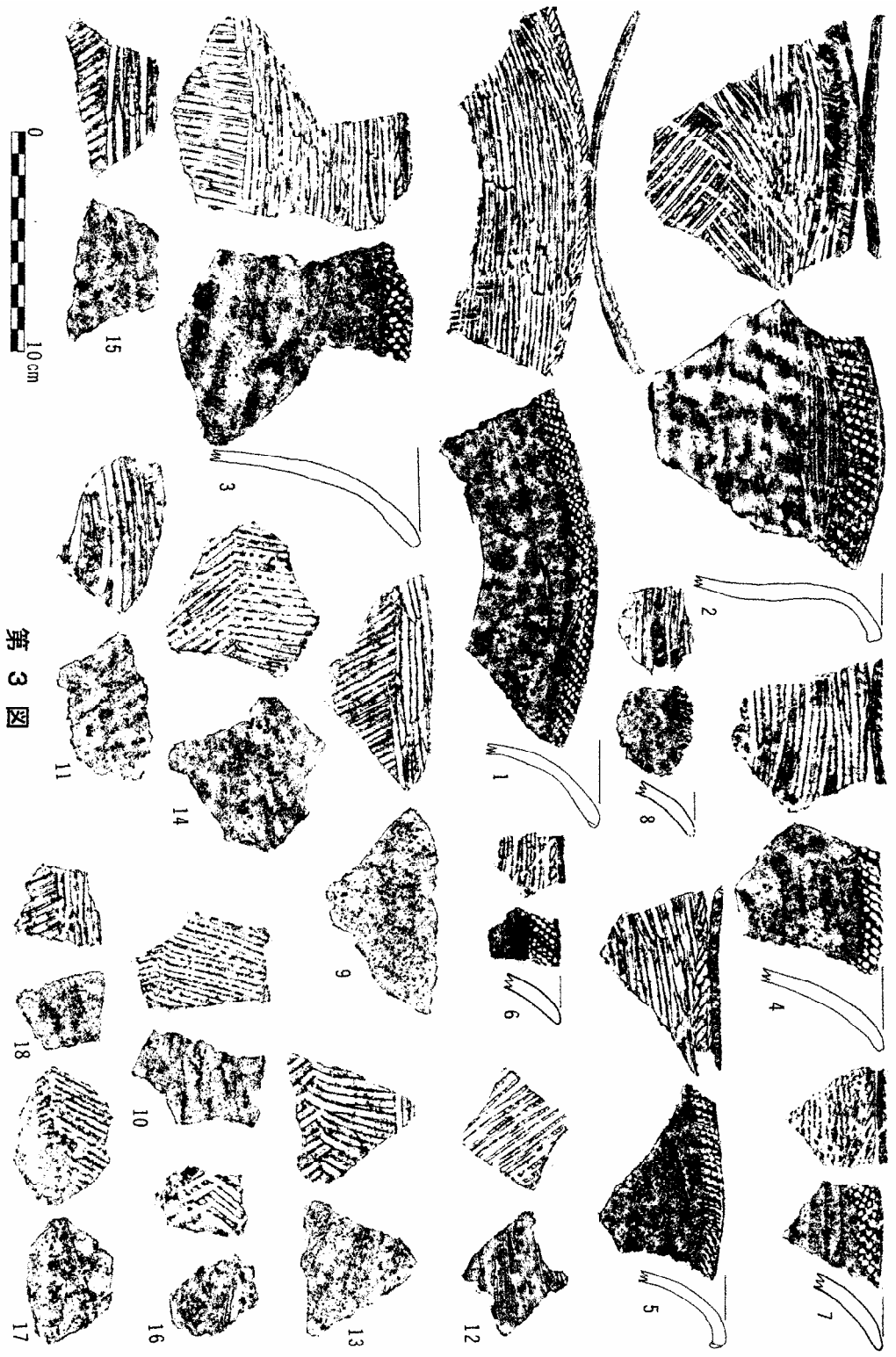
（名古屋市教育委員会文化課担当者及び発掘調査を統率して遺物整理を担当する者並びに調査員であった方々は、その後、博物館等で活躍されていたようである）

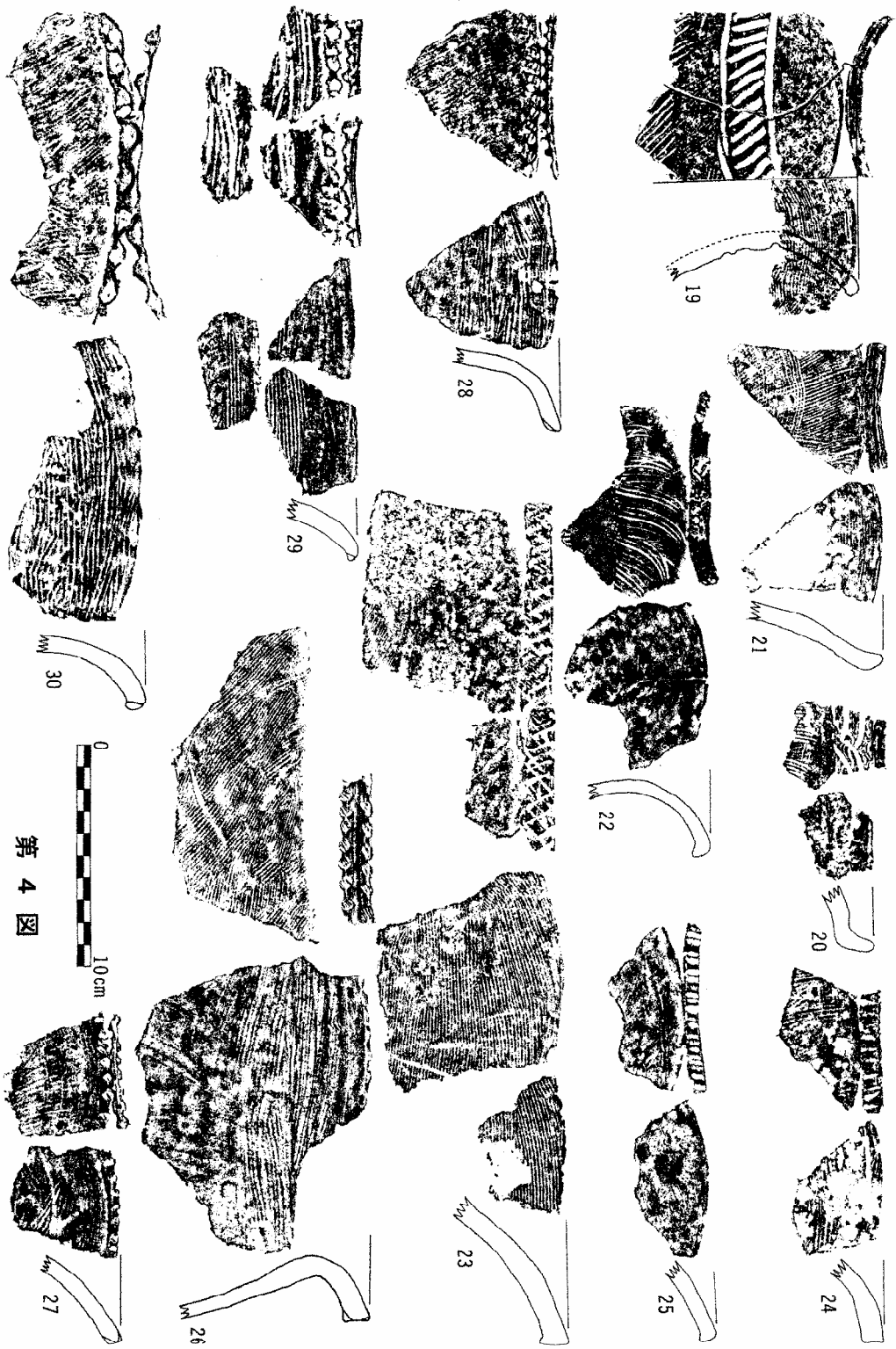
4 出土土器について

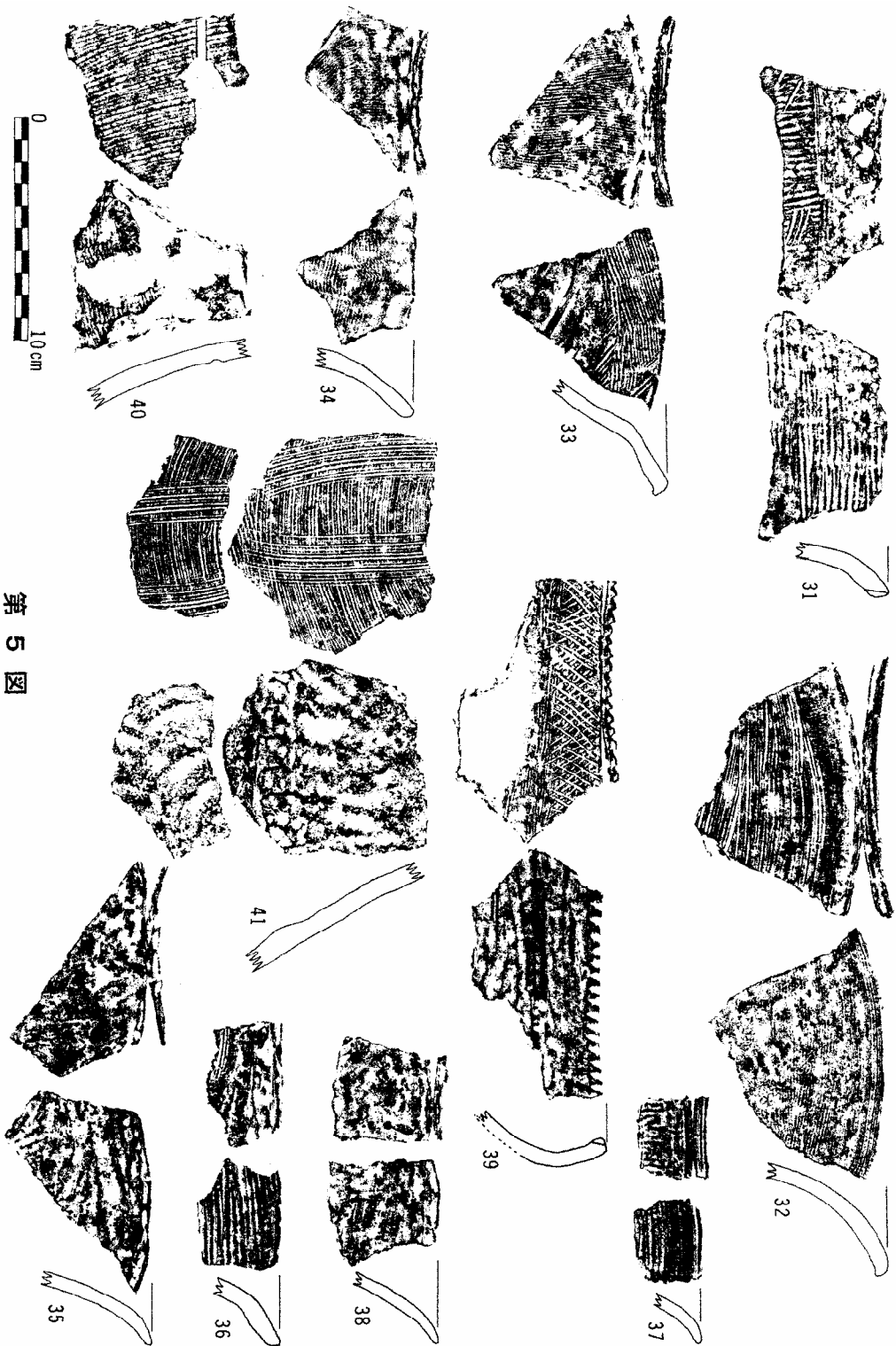
貝田町期の土器が出土している。土器図版の第3図～第6図は貝層中から採取した土器であり、第7図第8図は試掘時に掘りあげられた土砂の中から「拾った土器」である。しかし貝層中土器について約4×4.5mの狭い範囲における採取であり、掘りあげられた土砂の中から落ちて混入した土器もあると考えられる。

ところで、この地方の弥生時代中期遺跡の報告書（朝日遺跡、平手町遺跡等）（注2）における考古学をビジネスとしている人たちの土器の色調・成型調整方法・文様の施し方等に関する説明は細部に亘っているが、私は、考古学をビジネスとしている人達が有する能力もないので説明を拓本に代えて行うこととした。

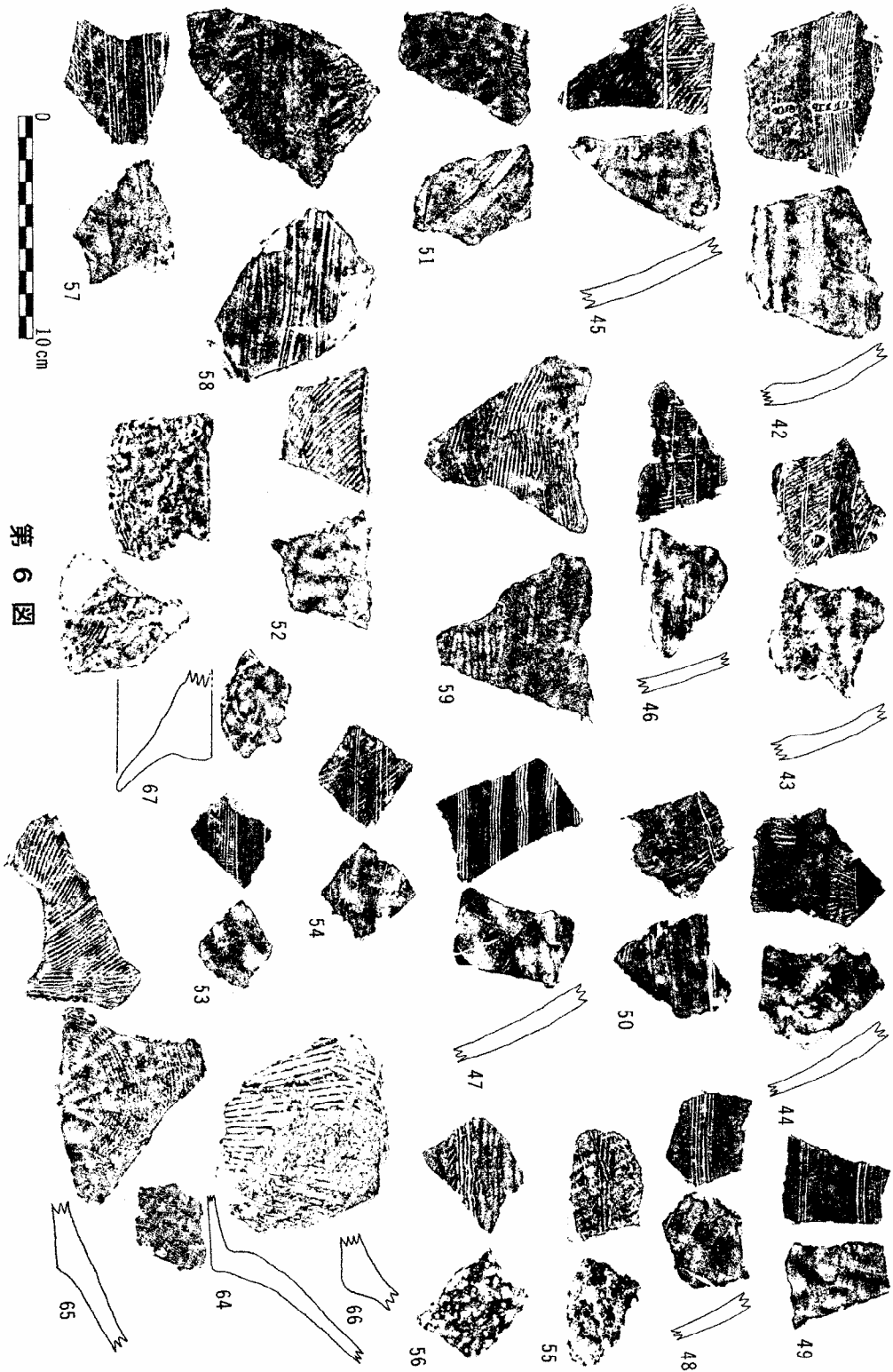
なお拓本により示すことができない土器の色調について、器表面が黒色を呈する土器は第4図19、第6図51、53である。黒色を呈する研磨帯が見られる土器は第6図42、54、第7図9である。器表面が黒色を呈し黒色を呈する研磨帯も見られる土器は第6図43である。第6図64は底部に布目痕が見られる。



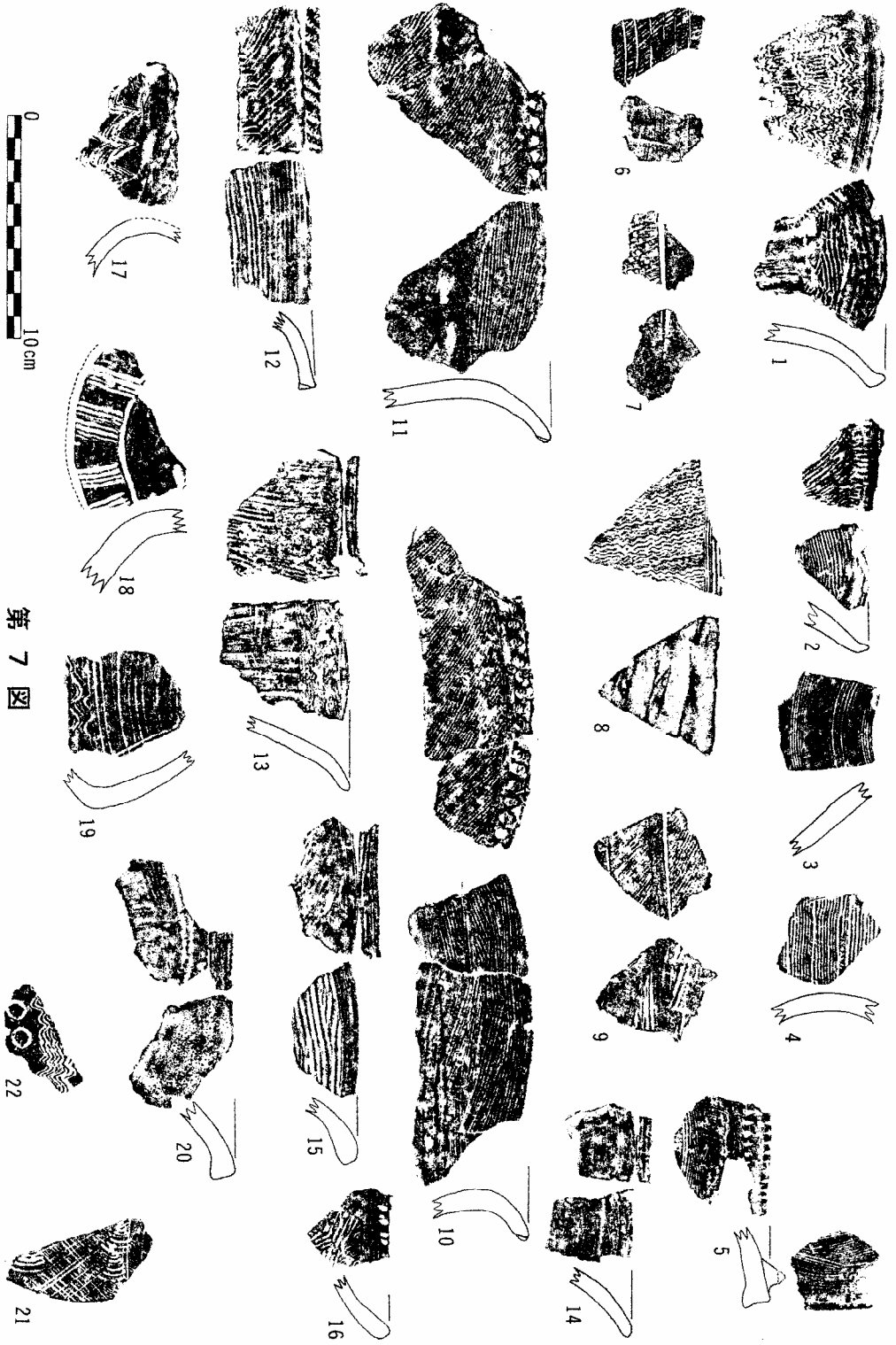




第 5 图



第 6 图



第 7 图

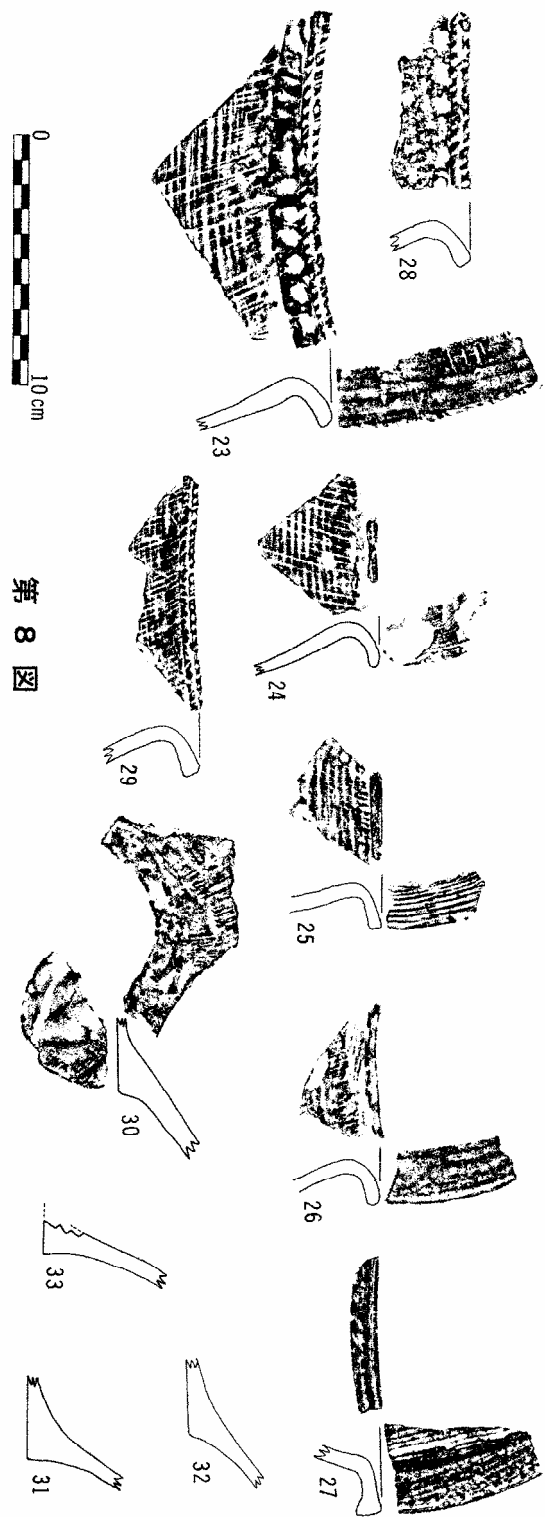
おって口縁部径が推測できる主な土器について第3図1は約26cm、2は約25cm、第4図19は約9.4cm、23は約27cm、30は約25cm、第5図32は約26cmである。

第6図67は台盤状土製品を想定している。名古屋市見晴台考古資料館「昔はみんなエコライフ考古学に学ぶ省エネのヒント」特別展において同型の土製品が甕型土器の底部に併置して展示されていたことがある。(注3)

5 おわりに

名古屋考古学会会報「古代人」66号、67号に「見捨てられた下前津遺跡」を記録してきたが、記録内容は主に工事現場における「拾った土器等」のことであり、方形周溝墓、住居跡等の発見記録は無い。

1939年、故吉田富夫氏は、名古屋市中区大池町一丁目において弥生土器片を採集され、この付近に遺跡の存在を推定されたことがある。(注4) また故三渡俊一郎氏は「尾張徇行記」の名古屋城府志の中に町毎に筆録された黒土、黒スクモの分布により名古屋城の外堀南方地区に遺跡群の存在を推定されたことがあるが(注5)、1963年12月、弥生後期の遺跡(第2図、K地点)が発見され(注6)、さらに1965年から行われた名古屋市地下鉄開通工事および都市再開発工事により縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代及び歴史時代の各期



第8図

に亘る遺物が出土しているが、方形周溝墓、住居跡等の発見は無かった。

しかし台地北部東側縁の標高10m上から出土した土器の保存状態は完全な形あるいはそれに近いものがあり、方形周溝墓、住居跡等の遺構が台地上から見出されるのではないかと考えていた。

2006年11月、地下鉄上前津駅南側の地点、春日町遺跡（第2区、K地点）から約90m離れた西側、台地上において、名古屋市見晴台考古資料館の発掘調査（担当は額額茂氏・伊藤厚史氏）により、欠山式期の方形周溝墓らしき溝が検出されたようである。欠山式期の春日町遺跡との関係に注目したい。

最後に故田中稔氏が高蔵遺跡外土居地区から出土した弥生中期貝田町期の条痕文深鉢型土器について「形式が推移する型」を分析されたことがあったが（注7）、このことを見晴台考古資料館が保管している1975年4月4日～1975年4月24日の間に名古屋市教育委員会が実施した専門家による発掘調査資料と私が保管している半ば拾ったと同然の狸掘り資料と併せて確かめてみたい。

見晴台考古資料館保管資料について報告書の発行をお願いする。

注

- 1 プロレタリア考古第15号 1974年11月1日 「プロレタリア考古」編集局
- 2 朝日遺跡群第一次調査報告 昭和50年 愛知県教育委員会
朝日遺跡V（土器編・総論編） 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 199
4 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
平手町遺跡—西志賀遺跡北東地点の調査— 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10
1集 2002 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 3 特別展、昔はみんなエコライフ考古学に学ぶ省エネのヒント 平成18年1月25日（水）
～3月26日（日） 名古屋市見晴台考古資料館
- 4 吉田富夫 1962 『郷土資料愛知の史跡と文化財』 愛知県文化財保存振興会
- 5 三渡俊一郎 1963 「名古屋市中区における古代遺跡の推定」 『美術文化史集談会
会報第14号』
- 6 和田英雄 1973年1月 春日町遺跡
- 7 田中 稔 1968年4月 「尾張における中期弥生式土器の研究」 『古代学研究51』
古代学研究会